

王 楚溪
WANG Chuxi



Rebirth

ブロンズ、銅、ステンレス



Rebirth

本研究では、食物を素材にして、食物自体が持っている質感や表情について、「食べる」という人間にとって最も基本的な欲求を美しさや楽しさとして捉え直すことを試みている。「食物は食べられる」という本来の意味から解放することを目的とする。

幼少期にジャンクフードを好んで口にしてきたが、肥満や社会的風潮としてジャンクフードを批判的に捉える傾向が強くなっている様に感じ、市場に出回っているにも関わらず、健康への影響等の理由により「食物」として価値が批判されていることに矛盾を感じた。自分自身の食べたいという欲求と批判的な声との対立関係をモチーフに、作品を通じて、食物を物質として捉え直したいと考えた。

素材の表情について知覚と表現の多様性をふまえて、作品を作る。例えば、中学時代、顕微鏡で花卉の細胞を観察する体験があり、それは、えびせんべいを揚げた時に見えたキラキラとした透明な気泡と似ていると感じた。だから、えびせんべいで開花のような作品を作った。食物であるから腐敗という一過性を持ち、それを展示で可視化することを試みる。作品『えびせんべいの印象』は展示期間を経て黄ばみ、枯れた花のようになった。一方、「腐敗」の可視化を作品に取り入れる事により、ジャンクフードや安価な食品と食物の流通に隠された社会的な利益を示唆することもできると考える。

修了制作「Rebirth」と前作「TOMORROW」では、生き物の表情や成長の方向性には、ある種の生存欲求が反映されていると思う。「不老不死は不可能である」とわかっている人も人はあらゆる方法、手段で、必死に永く生きようとする。この「生きたい」という欲求は、人々に期待、探求、闘争、苦痛、抑制、高揚、失望、絶望、安堵など、そして最後には消失という経験をさせるのである。最終的に見事な結末を迎えるのは、すべてこの原始的な欲求に起因すると思う。私は「生きたい」という気持ちの強さを感じた。つまり、私の食欲と人間の規則から生じた矛盾の上で、食物に潜む素材の美しさに感動し、その事を物質的素材として研究し、食物の存在意義を再構築する。